

二〇一七年度 一般入試C日程

国語

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は20ページ、解答用紙はマーク・シート1枚です。監督者の指示に従って確認しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. マークは、マーク・シートに記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、マーク・シートの所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があつてから、マーク・シートの左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国語

(60分) 100点 (解答番号)

1

28

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(60点)

言語学では、文字を、表意文字、表音文字、さらには、表音文字を、日本の仮名のような音節文字、アルファベットのような音素文字に細分化する。僕の記憶では中国語学者の藤堂明保は、表意文字という呼称の限界を突破するため「表語文字」という呼称を発明した。これですいぶん正確になったが、それでも「犬」が表語文字なら、アルファベット三字がかたまりとなった「dog」もまた表語文字と言える。「表音」「表語」という区分でも十分ではない。

(1) 従来の文字論は、「文字」という枠組の設定が誤りなのではないだろうか。言語学者や文字学者の頭の中には「d」という文字は存在しても、現実には「d」という文字など存在しない。実際に生きた言葉の現場では「d」は「dog」「hand」という文字を構成する一単位であるだけだ。「d」という文字が存在すると言っても一向にかまわれないが、言葉から離れて、「d」という文字だけが生きつづけることはない。

たとえば、こう考えてみれば、どうだろう。漢字「犬」と英語「dog」を対比したとき、「d」は「犬」字の第一画のようなもの⁽²⁾、「o」は第二画、「g」は第三、四画のようなものであると考える。そうすれば、「犬」と「dog」の間になんらの差もないこととは一目瞭然⁽²⁾だろう。

中国や朝鮮、日本に書があるように、アルファベット文化圏にもカリグラフィがある⁽³⁾。カリグラフィを装飾文字だと言って軽んじてはいけない。植物や動物、人物を意匠化したカリグラフィは、それはジュウコウで見事なものだ。

にもかかわらず、やはり、東アジア漢字文化圏の書と西欧のカリグラフィとは、何か根本的に異なっているように思えなくもない。現在の日本ではほとんど実用的とは思えないのに、多くの子供が今なお習字塾へ通うように、西欧で子供たちがカリグラ

フイ塾へ通うなどという話は聞いたことがない。習字と書とは密接に関係しているのに、西欧のペンマンシップとカリグラフィとの間には自然な脈絡があるように思われぬ。

日本語は表意文字・漢字と、表音文字・仮名から成り立っているのだから、表意文字が書を支えるというのは嘘だが、それでも漢字文化圏と西欧アルファベット文化圏とは何かが根本的に違っていて、両者の文化的違いをもたらしているようにも思える。それはいつたい何か。その違いは、文字の違いではなく言葉の違い、言葉の構造の違いである。たとえば記号論の母体となったスイスの言語学者・ソシュールは、文字について次のように書く。

言語と書とは二つの明らかな記号体系である。⁽⁴⁾後者の唯一の存在理由は、前者を表記することだ。言語学の対象は、書かれた語と語された語との結合である、とは定義されない。後者のみでその対象をなすのである。

すなわち、

一、書の記号は恣意的である。たとえばれの字と、それが指し示す音とのあいだには、なんの関係もない。

二、文字の価値は純粹に消極的であり、差異的である。かくして同一人がれの字をつぎのようにいろいろの書体で書くことができる、

れ
れ
れ

肝要なことはただ一つ、この記号が運筆上なりねなりと混同しないことである。

三、書の価値が生じるのはただ、一定数の文字からなる有限体系の内部におけるそれらの相互的対立のみによる。この特質は、第二のものとは同じではないが、それと密接な関係にある、というのは、二つとも第一のものに依存するからである。書写記号は恣意的であるから、その形態は問うところではない。いやむしろ体系の押しつける限界内においてのみ重要性をもつ。

四、記号の制作手段はぜんぜん問題にならない、それは体系の関知するところではないからである（これもやはり第一の特質からくる）。白く書こうと黒く書こうと、凹字にしようと凸字にしようと、ペンを使おうとのみを使おうと、それらの意

義にとつてはどうでもよいことである。

ソシユールの言語論は、西欧人にとつてはどうか知らないが、少なくとも我々漢字文化圏に在る者にとつては、底の浅い、表層的な理論である。書かれた語の唯一の存在理由は話された語を表記することだなどという説は、我々の言葉にはまったくあてはまらない。漢字文化圏の言葉においては、文字は言葉の構造の中に組み込まれている。である以上、西欧語だつて文字が言語構造の中にいくぶんかは埋まっていると考えるほうが、ソシユールの考えよりは正しいはずだ。日本はもとより中国だつて永く文字のない時代をへて来ているわけだから、話された言葉が基盤、基底であることに間違ひはない。現在だつて、文字など知らなくても狭い共同体内部なら十分に日常生活は可能である。

(9)、その生活は狭く限定される。現在の一般的水準としては、文字が言葉の中に構造的に埋まっているからである。

吉本隆明はその著『言語にとつて美とはなにか』の中で次のように書いている。

しかし、たとえば〈理性〉という指示表出文字を、〈りせい〉というかな文字でかくとき、わたしたちが、あるためらいをおぼえるのは、現在の言語水準で、〈りせい〉は、ひとたび〈理性〉という表意を頭におもいかべたうえで、〈理性〉のことであると納得するほかないからである。……これは、漢字を意味形象としてつかうという伝統のなかに、わたしたちが身をひたして、書き言語の発達と伝達言語の発達のあいだにひき裂かれているからで、急激にこれを断絶させようとするれば、

〈りせい〉↓〈理性〉↓〈理性〉という二段の手つづきをふむよりないからである。

ここで、「りせい」という仮名文字に一瞬とまどいを感じ、「理性」という漢字を思い浮かべることによつて初めて了解系に達するという迂回路をたどらざるをえないところに、東アジア漢字文化圏の言葉の構造の秘密が隠れている。

我々は平気で会話の途中で、「それどんな字書くの？」と訊き返している。話の途中でその文字を質す^たということは、文字が思

い浮かばなければ、発音だけでは発語においても了解においても言葉としていまだ十全に成立していないということだ。

読み書きのときだけではなく、我々は日常的に話すときにも、音、音声というよりも、むしろ文字にウエイトをかけている。比喩的に言えば、「文字を話し」「文字を聞く」。それは漢字だけだろうという反論もある。そうではない。外国語だって、文字という枠組を通して話し、文字という枠組を通して聞いている。それゆえ、早口で名乗る外国人の名前や聞いたことのない外国人の名前は何度繰り返し返してもらってもなかなか聞きとれない。それは片仮名五十音の枠組によつてなんとか了解に達しようとしているからだ。「ギョエテ」でも「ゲエテ」でもどちらでもかまわないが、片仮名で掬えなければ、聞きとれないのだ。

意識しているかしないかは別にして、我々は漢字、平仮名、片仮名、あるいはアルファベットを含めて、文字で話し、文字で聞いている。そのことに気づくことが少なかったのは、西欧の言語学理論に目をくらまされて、日本語の日常の姿に即して言葉の構造を見つめようとしなかったからだ。

「文字を話し」「文字を聞く」日本語においては、その書かれ方の中に、その意味はこめられてくる。漢字で書かれた「物」と平仮名で書かれた「もの」と片仮名で書かれた「モノ」とは、書きぶりだけではなく言葉の意味が違ってくるのだとすれば、同じ「もの」と書かれていても、その書きぶりの違いの中に、ごく微細であるにせよ、言葉の意味の違いはのせられていると考えるべきであろう。たとえば、僕の場合「××の××」という場合の格助詞の「の」の字は小さく書くが、「もの」という名詞の一部である場合の「の」の字は大きく書く。この違いに気づかず、気づいても単なる書きぶりの問題として軽んじてきたのではなからうか。「書は美術ならず」論争の小山正太郎のように、西欧にないのだから日本にもあるはずがないという思い込みで。

西欧ではいわゆる表意文字が変形して表音文字が生まれていることから、一時期、表意文字から表音文字へ進化するという説が⁽¹¹⁾ルフされた時代があった。これに呼応して、日本でも日本語を仮名書きにすべしという論や、ローマ字書きにすべしという論があった。むしろ仮名書き論やローマ字書き論は、単に現在の日本語を仮名文字やローマ字で表記しようというだけではなく、漢語系の言葉を廃して、文字に頼らない点で西欧語のような、⁽¹²⁾倭語系の統一のとれた日本語を人為的に創出しようというソウダイな理論でもあった。

しかし表意文字が進化して表音文字が生まれたというのは、あくまで「文字」という単位で見たときに成立する論であつて、言葉という大きな枠組から文字を見た場合には、その逆である。中国語は、文字が成立するや、その文字を言葉の構造の中に取り込み、中国語の構造を一変させ、それ以降は文字を抜きにしては成立しえない構造へと革命的な変化が起きた。北京語、広東語等、発音は異なるが文字は異ならないという、「文字を話す」言語が生まれたのである。

日本語の場合は、それ以上の一大変革である。おそらく素朴であつたとスワイテイされる無文字倭語の日本語世界に、中国から、陰陽二項対立的で理論的、思想的、かつ政治的言語がその文字とともに大量に流入した。その中国語と中国文字の水圧が、どれほど高いものであつたかは、日本がどの程度の国家を成立させていたか知れぬ紀元前数百年前に、孔子、老子、孟子、莊子、墨子、孫子らの政治思想が生まれていたことを想起すれば明らかだろう。

おそらく、身近な生活文化の微細さを中核に成立していた古代倭語は、とうてい中国語と中国文字の水圧に耐ええようはずがなく、その中国語の流入に身を委ねるしかなかつた。強い比喻を用いれば、日本語は中国語に占領されたのだ。中国文字に写し取られてすっかり変貌した倭語と中国語からなる日本語がこのとき以来徐々に形成されていったのである。それは教科書でいう「文字の伝来」などという生易しいものではなかつた。倭語の上に、中国語が上からのしかかつたのだ。(15)、その中で、つぶされずに残つた言葉が、現在言うところの「倭語」なのだ。

この意味で、言葉について言えば、日本語は、中国語の属領語である。属領語であるという用語が強過ぎるとすれば、母なる倭語と父なる中国語との婚姻によつて日本語は成立し、現在なお成立している。この時から日本語も、民衆の生活語圏はともかく、基本的な層位としては、「文字を話し」「文字を聞く」言葉と化したのである。

(石川九楊『書とはどういう芸術か』によつて)

(注1) カリグラフィ——さまざまな書体によつて美的に文字を書く書法。

(注2) ペンマンシップ——(特に英語の) 書法、習字。

問1 傍線番号①「従来の文字論は、『文字』という枠組の設定が誤りなのではないだろうか」とあるが、その理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

1

- ① 従来の文字論では、文字を表意文字、表音文字に分け、さらに表音文字を音節文字と音素文字に分けたが、「tog」の「d」などの文字がどれにあてはまるかについて疑問が残るから
- ② 従来の文字論では、漢字の「犬」は表意文字、「dog」の「d」は音素文字に分類されるが、アルファベットは漢字の字面に相当するため、表意文字ということもできるから
- ③ 従来の文字論では、「tog」の「d」を文字として扱ってきたが、実際には単体で使われることのない「d」を、独立した文字として論じることが適切とはいえないから
- ④ 従来の文字論では、文字を表意文字と表音文字に大別したが、実際には漢字は意味を表しているのではなく単語を示しているため、表語文字というべきであるから
- ⑤ 従来の文字論では、「tog」の「d」を文字として扱ってきたが、「dog」を文字とし、「d」をその構成要素の一単位とする場合、より細かい単位の名称が必要になるから

問2 傍線番号(2)・(4)・(5)・(7)・(14)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

2

6

(2) 一目瞭然

2

- ① 一度自分の目で見れば理解できること
- ② 一部分を見て全体が理解できること
- ③ 一目見てはつきりとわかること
- ④ 一部分を見ているだけであること
- ⑤ ひととき目立つ意見であること

(4) 分명한

3

- ① それぞれ独立した
- ② 区別のはつきりした
- ③ それだけで他にない
- ④ 起源を異にする
- ⑤ 系統が分かれた

(5) 恣意的

4

- ① 論理的な必然性がないさま
- ② 意味が一種類であるさま
- ③ あるものを象徴するさま
- ④ 多方面にかかわるさま
- ⑤ 捉えどころのないさま

(14)

中核に

6

- ① 根拠として
- ② 基礎として
- ③ 重要なものとして
- ④ はじまりとして
- ⑤ 目標として

(7)

関知する

5

- ① たずさわる
- ② 解き明かす
- ③ 得意とする
- ④ 感じとる
- ⑤ 考え合わせる

問3 傍線番号(3)・(8)・(11)・(12)・(13)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

7
11

(3) ジュウコウ

7

- ① キョウコウな態度
- ② 地域のシンコウを^〇る
- ③ 消化コウソがはたらく
- ④ コウレイ行事を行う
- ⑤ オンコウな人柄

(8) へて

8

- ① 音楽にケイトウする
- ② ポスターをケイジする
- ③ 試合の途中ケイカ
- ④ 業務をテイケイする
- ⑤ ルイケイ的な表現

(11) ルフ

9

- ① フヘン的な問題
- ② サイフの紐を^{ひも}締める
- ③ 交通費をフタンする
- ④ 一族のケイフをたどる
- ⑤ シュウシフを打つ

(12) ソウダイ

10

- ① 氷上をカツソウする
- ② 空気がカンソウする
- ③ ソウサ手順を覚える
- ④ ソウゼツな闘い
- ⑤ 在庫をイツソウする

(13) スイテイ

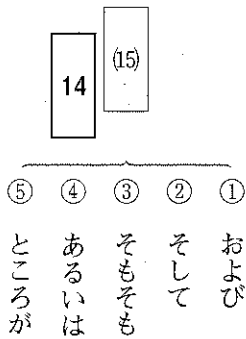
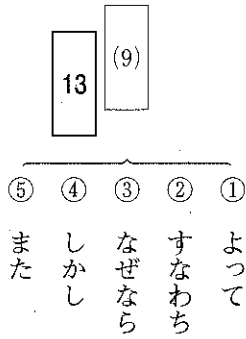
11

- ① 候補者をスイセンする
- ② 陸海軍をトウスイする
- ③ 国力がスイビする
- ④ 任務をカンスイする
- ⑤ 鉄棒でケンスイする

問4 傍線番号(6)「文字の価値は純粹に消極的であり、差異的である」を説明したものととして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 12

- ① 文字は、ある記号を他の記号と区別するかぎりにおいて価値があるということ
- ② 文字は、特定の言語体系の内部においてのみ、価値を発揮するということ
- ③ 文字は、その形態ではなく、表している記号の意味に価値があるということ
- ④ 文字は、話された語を表記することに唯一の存在価値があるということ
- ⑤ 文字は、その制作手段にかかわらず、ただ一つの意義をもつということ

問5 空欄番号 (9) (9) (15) に入る語として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。 13 14



問6 傍線番号10「東アジア漢字文化圏の言葉の構造の秘密」として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

15

- ① 伝統的に、漢字が意味形象として使われること
- ② 文字の書きぶりに、その意味がこめられていること
- ③ 読み書きだけでなく会話のさいにも、文字が重視されていること
- ④ 書き言語の発達と伝達言語の発達の間隔に隔たりがあること
- ⑤ 日常語に言語構造の特徴が隠されていること

問7 傍線番号16「言葉について言えば、日本語は、中国語の属領語である」とあるが、その理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

16

- ① 日本語は、中国文字の流入によって、古代倭語を排除した構造へと変化したものであるため
- ② 日本語は、中国の高度な古代国家から、政治思想とともに輸入された言語をもとに成立したものであるため
- ③ 日本語は、日常的で素朴な古代倭語が、論理的で洗練された中国語におきかえられたものであるため
- ④ 日本語は、表音文字であった古代倭語が、中国語の影響をうけて表意文字に進化したものであるため
- ⑤ 日本語は、漢字におきかえられた古代倭語と、中国から流入した言語によって成立したものであるため

問8 本文における筆者の考えと合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

17

- ① 「dog」のそれぞれのアルファベットは、漢字の「犬」の字面に対応するため、かたまりで表意文字といえる
- ② 日本において、子どもが習字塾に通うのは、西欧のカリグラフィと異なり、書が今なお実用的であるからである
- ③ スイスの言語学者ソシユールは、書かれた語と話された語のうち、書かれた語のみを言語学の対象とした
- ④ 漢字文化圏においては、聞いた音や音声を文字として認識できなければ、意味を理解することが難しい
- ⑤ 「物」「もの」「モノ」の表記の違いは、単なる書きぶりの違いであって、その意味の違いを考える必要はない

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

その比くらしも、都みやこに口痺くちひの妙薬めうやくをおぼえて、秘藏ひざうしけるもの有りけり。一休いっけきどくを聞きこし召まし、「いかにもしてしらばや」と思おもしめされ、やがてたづねあひ給たまひて、「しかじかの御ごくすりをしらせ給たまふよし、承うけりおよび候まをへて、あはれこの愚僧ぐそう御相伝ごさうでんをうけたくぞんじ、はるばる是これまでたづね参まゐり候まを」と申まをされける。かの人承うけり、「中々なかなかの事こと。さる妙薬めうやくをわれら代々たいていつたへ来きたり候まをへども、一子相伝いっしざうでんの秘法ひぽうなれば、他ほかにもらす事思まをひもよらず。さりながら注(1)きそくゆゆしき御僧ごそうと見奉まをれば、いなびがたくもこそ候まをへ。
(2) ふかき御執心ごしやくしんにてわたらせ給たまはば、他ほかに口伝くちでん有あるまじき御ごきしやうをかかせ給たまへ。しからばゆるしておしへ侍まをらん」とぞいひける。和尚わしやう聞きこしめされ、「我身わがみの大事だいじ。一代一紙いちだいいちしの誓文ちかぎなれども、愚僧ぐそうにをしへてたび候まをはば、心得こころえ侍まをる」とて、すみぐるにこそかかれける。

やがてならひ得えて、庵いほにかへり、あざわらひての給たまふやう、「人のやまひにくすりとなるべき物を、秘藏ひざうして、ひとりおぼえたらんは、慈悲じひのうとき心なり。これらの事をひざうとせば、おそらくは秘ひしても秘ひしがたき、一大事いちだいじ因縁いんえんをばいかがせん。さりながら、仏神ぶつじんの冥罰みやうばつそらおそろし。さらば札しやくをかきてしらせん」とて、

一 口痺くちひのくすりの事

もしこうひをやむものあらば、かならずみかんのさねねをくろやきにしてのむべし。なほる事すみやかにして、ふたたびおこる事なし。⁽⁴⁾是これきたいの妙薬めうやくなり

と書かきて立てられける。

おしへけるもの是これを聞きき、⁽⁵⁾以も之の外ほかに腹はらをたて、せほねをいからかして、いそぎむらさき野のにはしり行き、一休いっけをたづね出し、「いかに御僧ごそう、はかいむぎんの売僧うりそうかな。何なにとて大事だいじの秘薬めうやくをならひ得えて、他ほかに口伝くちでんせまじとて、きしやうをかきながら、あまつさへ高札たかしやくをたてて万人ばんにんのめにさらす事、いかなる曲事くせぞや」と、しのびかねたるそのふぜい、打ちはたしてもこらへがたく、まつくろになりていかりければ、⁽⁶⁾さしもの一休いっけなれども、おめきころすかとぞ見みえにける。⁽⁷⁾

されどもおどろくけしきなく、そらさぬかほにもてなし、「あらごとごとしの有様や。何事をかくはの給ふらん。きしやうをかきしも誠なり。しかるに、札をたてしてもいつはりにあらず。さりながら、口伝せまじどかきぬれば、口伝は一人もせざるなり。札をたてじどかかざれば、たてたる事があやまりか。きしやうに少しもそむかざれば、⁽⁸⁾仏神のばちもおそろしからず」とて、そらうそむひてましましける。かの者あく^{まて}迄のしり、怒気におかされて、方寸にせまりけるが、一言のぬけ句に返答をうばはれ、ことばもなくかへりける。

〔二休ばなし〕による

(注1) 口痺——喉の病氣。

(注2) きどく——効能のすぐれていること。

(注3) 一子相伝——秘法として自分の子どもの中のひとりだけに伝えて、他の者には秘密にすること。

(注4) きそく——心の外面に現れた様子。

(注5) きしやう——神仏に誓いを立てて、それに背けば罰を受ける旨を記すこと。また、その文書。

(注6) さね——種。

(注7) はいむざん——戒律を破つて平気で恥じないさま。

(注8) 売僧——仏法に背く僧。僧をののしつて言う。

(注9) 方寸にせまりける——氣をもむ。心をせきたてる。

問1 傍線番号(1)・(3)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

18

19

(1) ゆゆしき御僧

18

- ① 縁起の悪いお坊さま
- ② 霊験あらたかなお坊さま
- ③ そらおそろしいお坊さま
- ④ たいへん立派なお坊さま
- ⑤ 風変わりなお坊さま

(3) 聞こしめされ

19

- ① お聞きになつて
- ② お聞かせになつて
- ③ 申し上げて
- ④ お許しになつて
- ⑤ お話しになつて

問2 傍線番号(2)・(4)の口語訳として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

20

21

(2) ふかき御執心にてわたらせ給はば 20

① 強くこだわっていらつしやるので

② 強く望んだお越しであるので

③ 強く望んだお越しのようなので

④ 強くお望みでいらつしやるので

⑤ 強くお望みでいらつしやるならば

(4) 是きたいの妙薬なり 21

① これは効果が期待できる妙薬である

② これは他では手に入らない妙薬である

③ これは世にもまれな妙薬である

④ これは皆が待ち望んでいた妙薬である

⑤ これは効果が長く続く妙薬である

問3 傍線番号(5)「是を聞き」とあるが、「是」の指す内容として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

22

- ① 一休に仏神の罰があたったこと
- ② 一休が高札を立てたこと
- ③ 一休が誓文を書いたこと
- ④ 一休が薬の作り方を習ったこと
- ⑤ 一休が薬の作り方を口伝したこと

問4 傍線番号(6)「いかりければ」の主語として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

23

- ① 一休
- ② こうひをやむもの
- ③ 和尚
- ④ おしへけるもの
- ⑤ 仏神

問5 傍線番号(7)・(8)の文法的説明として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

24

25

(7) 見えにける

24

- ① ヤ行下二段活用動詞の連用形＋完了の助動詞の連用形＋過去の助動詞の終止形
- ② ア行下二段活用動詞の連用形＋完了の助動詞の連用形＋過去の助動詞の連体形
- ③ ヤ行下二段活用動詞の連用形＋完了の助動詞の連用形＋過去の助動詞の連体形
- ④ ア行下二段活用動詞の連用形＋格助詞＋過去の助動詞の連体形
- ⑤ ヤ行下二段活用動詞の連用形＋格助詞＋過去の助動詞の終止形

(8) かきぬれば

25

- ① カ行上二段活用動詞の連用形＋完了の助動詞の已然形＋接続助詞
- ② カ行四段活用動詞の連用形＋完了の助動詞の已然形＋接続助詞
- ③ カ行四段活用動詞の連用形＋完了の助動詞の終止形＋尊敬の助動詞の未然形＋格助詞
- ④ カ行上二段活用動詞の連用形＋完了の助動詞の終止形＋尊敬の助動詞の未然形＋格助詞
- ⑤ カ行四段活用動詞の連用形＋打消の助動詞の連体形＋完了の助動詞の已然形＋格助詞

問6 傍線番号(9)「仏神のばちもおそろしからず」とあるが、その理由の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から

一つ選びマークしなさい。

26

- ① 薬の作り方を立札に書いたのであり、他に口外しないという起請文の内容には背いていないため
- ② 起請文の内容には背いたが、人の役に立つ薬を広めることは神仏の意に反するものではないため
- ③ 起請文を守って、人の役に立つ薬を秘藏して利益を得ることこそ、罪深いことのはずであるため
- ④ 薬の効能を立札に書いて立てたのは本当であるが、起請文を守って作り方は書いていないため
- ⑤ 起請文で誓いはしたものの、愚僧である自分は神仏の存在を信じておらず、罰など怖くないため

問7 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

27

- ① 一休は、初めから薬の作り方を世間に大々的に広めるつもりで、それを秘藏している者をたずねた
- ② 喉の病気の薬の作り方を知る者は、利益を独占するために、作り方を一子相伝の秘法と定めた
- ③ 一休は、薬の作り方を知らず、一生に一枚しか書くことができないう起請文を書くのをためらった
- ④ 喉の病気に効く薬の作り方は、みかんの種を黒焼きにしてすりつぶし、飲むというものであった
- ⑤ 一休のもっともらしい言い訳に返す言葉もなく、喉の病気の薬の作り方を教えた者は帰って行った

問 8 本文の出典である『一休ばなし』は江戸時代の仮名草子であるが、同時代の成立でないものを、次の①～⑤の中から一つ
選びマークしなさい。

28

① 日本永代蔵

② 笈の小文

③ 十訓抄

④ 雨月物語

⑤ 曾根崎心中